

みなわ集の事など

泉鏡花著

森さん、鷗外さんでお話を申します。――何は
おいても、先生と言はなければならぬのでせうけ
れど、私には唯一人、紅葉先生がありますから、こ
れは笑つて御免下さい、未だ嘗て誰方をも先生と呼
んだことはありません。――
實は手紙を下さ

る時など、洒落にしる、串戯にしる、私如きを先生
と云つてよこして下さるお方があります。禮として、
此方からお返しをしますのに、先生。――とし
ようと思つて、しばらく考へるのですが、何うして
も紅葉先生に濟まない氣がして、つい何々様で、
失禮をして居るやうなわけですから。

然う／＼「様。」と言へば、此の字について、
お話があるのですよ。森さんの、あの即興詩人のう
ち「一故人」の條に「畫工。御免なされよ
云々。吏。様が。左（と警咳一

つして讀上くるやう）「フレデリック、サイズ、
パール、ラ、グラス、」と言ふのがあ
るのですがね。此は誰が一寸見ても、「吏。左様

か。「の誤植だらうと思はれるのですが、一字處か、字の一劃と雖も、ゆるがせにされない御存じの文章でせう。めつたに校正の間違なんぞあるものぢやない。こゝは端正なる一篇の中でも、「畫工進み出で、御免なされよ、」と言ふ調子で、關守の吏をはぐらかす全篇唯一箇處、諧謔味のあるらしい處ですから。「左様か。」を故と裏返しにした、様か、左。「と言ふ、原文なり、譯文なりであらうと思つて居ましてね、（一）一 菊判本上巻二〇四頁二行めにあります、縮刷本には訂正がしてあります（一）いつか、西園寺さんの雨聲會の七八回めだつた濱町の常盤の時、飲んだ酒を殺して、森さんの傍へ進んで、此の話をしますとね、一寸、横の方へ俯向くやうになすつたつけ。然うですか、そんな所がありますか、と二つばかり軽くうなづいて、誤植々と、くす／＼とお笑ひでした。愚問ですな（一）考へると汗が出ます。こんな愚問こそ、様か、左ですよ。英雄人を欺いたんぢやあない。此方が眩惑させられたんです。

愚問と言へば お話は少々違びますが、柳田國男

氏は典範とすべき紳士で、そして學者です。古今にわたつた深い趣味の中の一つとして、山男、山女の生活に精しいのです。同氏が主幹だつた、郷土研究に山人外傳志料と言ふのがあつて、明細に研究をされて居ますが、一口に言へば、いや早合点で申せば、山男はつまり山奥に取残された人種だと言ふ事に成るのです。山男は分りました。其處で山姫は何でせうかと いつか會つた時、霧、霞の振袖に、戸隠升麻、白根葵の裾模様を、意氣込んで聞いたものです。餘り奇問に、しばらく考へて居なすつたつけ。それはあなた、山男の娘ですよ。端的明快ぢやありませんか。此方に豫備知識がないと、言ふことがとんまで、間拔で、愚問以上の奇聞になります。―― お恥かしいね。

處で、森さんにはじめてお目に懸つたのは、雨聲會の第一回、つゆの雨のしと／＼と降つた頃で、西園寺さんの駿河臺のお邸でした。簡素な―― 勲章も何も無い、軍服でおいででした。腰のあたりに、何となく晃々としたものは、人目に輝いたが、威風凛々なぞは忘れたやうで、背こゞみに小さく坐つて、

一寸横を向いて莞爾としておいでなさる。正座です、床には青葉の影をめぐつて、名香が縷々として薫じて居ました。が、其の御様子ですから、臆面なしにお話が出来ました。

座中に、みなわ集のうはさが出た時　――　はや
く其の出版當時の事。　私どもが一冊づゝ
心得て秘藏して居たはいゝが、驚破と言ふと、いや
それほどの一大事ではありません。蕎麥と言ふと、
汁粉と言ふと、恐縮ながら、水沫集を質に入れたもの
なんです。出版後、しばらく経つと、版が切れて
居たものですから、原價、並製が四十錢、上製が六十
十錢　――　とたしか覺えて居ますが、悉しくは春
陽堂の方でお調べ下さい　――　其の並製を質屋で
三十錢、上製を五十錢貸しました。てくだで口説くと、
並製を以て上製に替へて五十錢とお目にかける
事が出来たのです。市の賣價が原價の四倍五倍と言
ふのですからね。米がいくらの時だと思ひます。紅
葉先生の太添削をいたゞいた小作、月下園と言ふの
に、「串戯ぢやない、お米は兩に六升五五合だよ。」
と言ふ先生おかき入れの文句であります。明治三

十五六年ねんがそれでせう。みなわ集しふの利子りしのあけさげに苦くんだのは、二十六七年ねん頃ころですから、兩りやうに

あゝ兩りやうに、と言いびたいが、實じつはわれ／＼に取とつ

ては、升しやうが六七錢せん。五十錢にあれば、床屋とこや

へ行いつて、湯ゆに入はいりて、蕎麥屋そばやでおかはりをして、

寄席よせで――私わたしは行きませんがね――女義太たれぎ

夫だが聞ききました。皆みなが實行じつかうしたものです。今いまの金子かね

だと五六圓えん、もつとにも當あたりますか、貸かしましたね。

尤もつとも質屋しちやは矢來やらいにあつて、亭主ていしゆ俳名はいめいを蕉雨せううとか言いつ

て、青あをい長ながい顔かほの若わかい男をとこで、専せんら正風せいふうを稱となへたもの

で、本ほんの名なぐらゐ知しつて居ゐたから、餘計よけい奮發ふんぱつをした

ののかも知しれません。たゞし、これを口説くどく場合はあひだけ

は、芭蕉ばせをを火ひの番ばんのおやぢぐらゐにしか思おもはない。

少壯せうさう血氣けつきの談林だんりんも新派しんぱも、皆みな正風せいふうに歸依きえしたから笑わら

はせませう。

何なに、雜ざつとですが、其その兩聲會うせいくわい第一くわいの席上せきじやうで、こ

んなお話おはなしの出來できたほど、鷗外おうがいさんは打解うちとけておいで

でしな。で、そんなに貸かしましたか、質しちも御存ごぞんじあ

るまいに、一寸横ちよつとよこを向むいてうつむいて苦くるしみしておいで

でした。

愚問でない。お教をうけに、おうかゞひ申したいと思ひながら、御遠慮を申すうちに、おなくなりになりました。――何とも申しやうはありません。

急なお思ひたちで、鷗外さんの追弔のため臨時増刊についておほねをりと申すうちも、此のお暑さですから、お察し申します。――春も秋も、分け即興詩人は、殆ど一日も拝見しない日はないと言つていゝくらゐです。此の頃の暑さで御覽なさい。

私は何故ですか、行水だ、青簾だ、アイスクリームだと言ふ。わるく涼しがらうとする景物は、何だか却つて暑くなるしい。日盛りの碧空を寢轉

んで見ながら、「時は暑に向びぬ。カムパニアの野は火の海とならんとす。」この野邊にては、

日光ますぐに射下せり。我が立てる影さへ我脚下に没せんばかりなり。水牛は或は死せるが如く枯草の上に臥し、或は狂せるが如く騒げめぐりたり。」

――沼は涸れたり。テエエルの黄なる水は生温くなりて、眠たげに流れたり。西瓜の汁も温し。

土石の底に藏したる葡萄酒も酸くして、半ば煮たる如し。――即興詩人を讀むのが會心です。此の温き

西瓜すゐくわの汁しるはアイスクリームより清きよく涼すずしく、此この半なかば煮にえたる葡萄酒ぶだうしゆは、ソーダ水すゐよりも純じゆんにして冷つめたい。
「天てんには一せん織雲うんなく、いつもおなじ碧色へきしよくにて、吹ふく風かぜは唯ただ熱あつき」「シロツコ」(東南風)
のみなり。「と一どく讀よし三さん誦じゆして、名譯めいやくに我われ知らず、動悸どうきして唾つの乾かわくにあたりて、一わん碗わんやくるが如ごとき番茶ばんぢやを吃きつする時とき、或あるひは、到來たうらいものあるがために、少々せう／＼氣取きとつて、キュラソーの一いっ盞さんを、(セツク)と水上みなかみ瀧太郎たきたらうさんに此このごろ教をそはつたばかりの讚語さんごを用もちゐて、チリ、と唇くちびるに含ふくむ時とき、遙はるかにハンパニヤの曠野くわうやを望ぞみ、恍惚くわうつとして、低ひくき雲くもの峰みねに、目めの赤あかき水牛すゐぎうの状さまを思おもつて、颯爽さつさうたる涼味りやうみの三伏ぶくの暑熱しよねつを消けす嬉うれしさを感謝かんしやします。――

濱野はまのさん。――あなた方かた編輯へんしふの方々かた／＼の御盡力ごじんりよくで、森もりさんにお親したしかつた皆みなさんの悉くはしいおはなしのあるのを、偏ひとへに待まちます。私わたしはたゞあなたの方かた、なりふりも容子ようすも忘わすれて、此この炎天えんてんを、御奔走ごほんそうなさるのに對たいして、きまりの惡わるさを顧かへりみず、愚問ぐもんでない、愚談ぐだんをしました。

森もりさんの英靈えいれいも御海ごかい恕じよくだ下さい。

【完】